

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 22 日現在

機関番号：12604

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370582

研究課題名(和文)日本語学習者の言語行動のバリエーション獲得に関する研究

研究課題名(英文) Research on the Acquisition of Variation in Verbal Behavior Among Learners of Japanese

研究代表者

谷部 弘子 (YABE, HIROKO)

東京学芸大学・留学生センター・教授

研究者番号：30227045

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、非日本語環境で学んだ日本語学習者がどのような日本語を身につけているか、来日後新たに何を獲得するかを探索的に明らかにすることを目的とし、短期留学生を主な対象に、接触場面および学習者場面の自然談話の収集と半構造化インタビューによる意識調査を、来日直後と約1年後の2回にわたって実施した。主に三つの側面(1)接触場面における意味交渉に注目した調整行動の分析、(2)いわゆる「雑談」を維持するための言語行動に注目した話題連鎖の分析、(3)スピーチスタイルの選択に注目した学習者意識の分析)からデータの観察・分析を行った結果、言語行動のバリエーションの異なりや広がりが確認された。

研究成果の概要(英文)：This research aimed to investigate what kind of Japanese was acquired by learners of Japanese in non-Japanese environments, and what these learners would newly acquire after moving to Japan. Most of the research subjects were foreign students staying in Japan for a short time. Natural conversations in contact and study situations along with attitude surveys based on semi-structured interviews were collected twice; the first was immediately after the subjects had arrived in Japan, and the second was approximately one year after. Upon completing the analyses of three focused areas, which are (1) the analysis of adjustment behavior on the negotiation of meaning in contact situations, (2) the analysis of topic chains on verbal behavior to maintain small talk or "chatting," and (3) the analysis of learner awareness on the selection of utterance styles, the observation and analysis results of the data demonstrated differences and the broadening of verbal behavior variations.

研究分野：日本語教育

キーワード：自然談話 接触場面 学習者場面 意味交渉 調整行動 話題連鎖

1. 研究開始当初の背景

社会言語学の分野では、話し手や場面などにより異なることばの多様性についてさまざまな調査研究が行われ、成果を上げてきた。日本語教育においても、日本語学習の背景や目的の多様化に伴い、日本語のバリエーションが注目されており、例えば、『日本語教育』（日本語教育学会会誌）では2007年に「日本語のバリエーションと日本語教育」というテーマで特集が組まれている。この特集で、渋谷（2007）は、社会言語学の立場から、日本語学や日本語教育がなぜいま日本語の（広義の）バリエーションを考える必要があるのか、その理由を考察した上で、社会言語学の「成果をいかに日本語教育の実践とリンクさせるか」ということについてはまだギャップがある」とし、その乖離は、日本語非母語話者の使用する日本語バリエーションの実態調査がまだあまりなされていないことによるとしている。同様の指摘は、日本語教育のためのコミュニケーション研究が必要だと主張する野田（2012）にも見られ、いくつか公開されている日本語非母語話者の日本語コーパスも非母語話者がインタビューに答える発話にとどまっている現状を指摘している。

国内の地域在住外国人はもとより、近年では日本語環境にない中でも、インターネット等通信媒体の発達にともない、非常に多様な日本語を身につけている学習者も少なくない。そうした学習環境の多様化を背景に、言語知識よりも言語行動や課題遂行能力が学習者の能力を測る指標としてより重視されるようになってきている。今後は初中級段階においても、単なる一般的なモデルの提示にとどまらず、さまざまな角度から言語行動のバリエーションの提示に配慮した教材の開発が求められるだろう。一方で、国内の「生活者としての外国人」を対象とした言語行動調査は近年国立国語研究所を中心に進められてきているが、主に非日本語環境で学んだ個々の学習者が、具体的にどのような場面でどのような言語行動をとっており、そこにどのような問題が生じているかは十分に把握されておらず、今後の調査研究が待たれる状況にある。

2. 研究の目的

本研究は、外国人日本語学習者による言語行動のバリエーション獲得に関する探索的研究であり、以下の2点を目的とする。

(1) 非日本語環境で学んだ日本語学習者の場面別自然談話データを収集し、言語行動のバリエーションという観点から分析する。

(2) 非日本語環境で学んだ日本語学習者の、言語行動のバリエーションに対する認知的視点および獲得の過程を半構造化インタビューにより探索し、記述する。

3. 研究の方法

上記の(1)(2)の目的を明らかにするために、東京都内のA大学および地方のB大学・C大学において学ぶ留学生の協力を得て、基本的に非日本語環境で学んだ日本語学習者の日常談話の収集を行った。協力者は、都内A大学と地方B大学の学部レベルの短期留学生18名と、地方C大学の学部正規生11名である。出身地域は漢字圏（中国・韓国）11名、非漢字圏（ベトナム・タイ、欧米等）18名であり、来日前の学習歴は最も短い者で半年、長い者で8年半となる。

協力者のうち短期留学生（留学期間11～12ヶ月）には、来日後2か月以内（「来日時」）と帰国前の1ヶ月以内（「帰国時」）に、母語話者との会話（接触場面）および学習者同士の会話（学習者場面）の2場面各15～30分の日常談話の収録を、学部正規生には来日後2か月以内（「来日時」）と約1年後に、同年代母語話者との会話および年上の母語話者との会話の2場面各30分の談話の録音を依頼した。収集した談話はすべて文字化して資料とした。また、談話データ収集の二時期に、主に日本語学習に関する意識を問う半構造化インタビューを合わせて行った。調査期間は、2013年10月～2014年9月である。

上記のデータをもとに、主に非日本語環境で学んだ学習者の言語行動にどのようなバリエーションや変化が見られるかを横断的・縦断的に観察・分析した。なお、ファン（2006）では、「参加者のどちらかが相手の言語を用いてインターアクションを取る場面」を「相手言語接触場面」、「参加者の双方が自分の言語ではなく第三者の言語でインターアクションを取る場面」を「第三者言語接触場面」としているように、上記の「学習者同士の会話」も接触場面の1類型ではあるが、ここでは、日本語学習途上にある留学生どうしの会話に焦点を当てる、という意味で、「学習者場面」という用語を用いた。

4. 研究成果

(1) 接触場面における意味交渉に注目した調整行動の分析

まず、初級終了レベルから上級レベルにわたる「来日時」談話を資料として、接触場面における意味交渉（negotiation of meaning）に注目し、問題が生じた際の調整行動を観察し分析した。

意味交渉研究においては、「参加者間で問題を解決しあう過程でどのような調整行動にもとづく発話交換が行われるか」（宮崎2002）が焦点となっている。宮崎（2002）では、この意味交渉研究のあり方について、「意味交渉研究の中心作業は、調整ストラテジーの類型化にあるのか」「意味交渉の分析対象は『意味』だけで十分か」といった8つの問題点が挙げられている。

このような指摘に鑑み、本研究では、調整ストラテジーを類型化するのではなく、問題が生じたとき、どのような学習者がどのよう

な場合にどのような調整行動、調整ストラテジーをとっているのか、あるいはとっていないのかについて質的な分析を行うこととした。分析にあたっては、自己調整タイプ(「他者マーク自己調整」「自己マーク自己調整」)、他者調整タイプ(「自己マーク他者調整」「他者マーク他者調整」)という会話参加者の調整行動のパターン(宮崎 1999, 2002)を手がかりとして、学習者の調整行動に臨む態度と日本語習得状況との関連をみた。

分析の結果、学習者の調整に臨む態度には違いがみられること、レベルの高い学習者には、調整行動の回数だけではなく、内容的にも質の高い調整行動が見られることがわかった。日本語能力の低い学習者には、語彙レベルの意味が理解できただけで、調整行動を自分から終了しようとする例もみられるのに対し、日本語能力の高い学習者には、社会文化的な意味まで完全に理解できるまで調整行動を繰り返す態度がみられる例もあり、こうした調整行動の質的な違いが習得状況に反映されるものと考えられる。その一方で、学習歴の短い学習者は、相手の言葉がわからなかったり聞き取れなかったりした場合、聞き返すことが多いのに対し、学習歴が長くなると、聞き取れた言葉だけを手がかりに話を進めるなど、会話を進めるためのなんらかのストラテジーを身につけているという特徴がみられた。

また、母語話者は、特にレベルの低い学習者に対して「他者マーク他者調整」による調整行動を頻繁におこなう傾向がみられた。しかし、この調整行動は、学習者には気づかれずに終わってしまうことも多く、学習者にとっては自身の不適切性が顕在化しないということになり、習得にとって有効であるかどうかは疑問が残る。逆に、レベルの高い学習者に対するとき、母語話者は会話の流れを優先し、調整行動を行わないことがある。この場合もまた、学習者にとっては自身の問題が顕在化しないということになる。

(2) いわゆる「雑談」を維持するための言語行動に注目した話題連鎖の分析

つぎに、短期留学生の談話データに限定し、対話の維持という観点から、「来日時」と「帰国時」の談話の変化を縦断的に観察・分析した。

本研究で収集した日常談話データは、「誘う」「許可を求める」といった、ある特定の目的を持った談話ではなく、いわゆる「雑談」である。日本語会話教育への応用を目指して雑談の構造パターンの抽出を試みた筒井(2012)は、「雑談」を「特定の達成すべき課題がない状況において、あるいは課題があってもそれを行っていない時間において、相手と共に時を過ごす活動として行う会話」(筒井 2012: 33)と定義している。大学や寮など日々の生活空間をともにする留学生どうしや同年代の日本語母語話者とかかわる「雑

談」は、1年という日本滞在期間中に日本語力の向上や日本の文化・社会の理解を目指す短期留学生にとって、良好な人間関係を構築し維持する上で欠かせない言語行動であろう。

分析にあたって、筒井(2012)が示した枠組みを援用し、主として話題の開始の仕方に着目した。筒井(2012)は、雑談の話題ごとの第一発話のタイプから連鎖組織を4つのグループ(「質問から始まる連鎖組織」「報告から始まる連鎖組織」「共有から始まる連鎖組織」「独り言から始まる連鎖組織」)に分類し、合計30の連鎖組織を提示している。

分析の結果、いわゆる「雑談」を維持するための言語行動においてバリエーションの広がり確認された。中級レベルの学習者の来日時談話では、比較的単調な[情報要求 情報提供]の連鎖が主であったのに対し、帰国時談話では<語り>(報告)や<意見要求>(質問)から始まる連鎖が加わり、驚きや共感、確認などの表示をしながら、話題を展開させていっている。また、対話の維持に積極的に働きかける主体的な行動が多くなった。こうした言語行動におけるバリエーションの広がり、日本に来ることによって得られる日本語使用の場面や関係性の多元化・重層化が作用しているものと思われる。とくに、留学生活で親密な関係を構築し得る学習者どうしの談話には、「報告から始まる連鎖」や「共有から始まる連鎖」が接触場面よりも起きやすく、談話内容の深まりにつながる事例が見られた。こうした現象は、日本語教育において学習者場面を取り入れることの有効性を示唆しているものと考えられる。

(3) スピーチスタイルの選択に注目した学習者意識の分析

都内A大学の協力者に行った半構造化インタビューの資料から、スピーチスタイルの選択に関して学習者がどのように考えているか分析を行った。インタビューはごく限られた短期留学生を対象に実施したものであるが、通常の授業時からうかがい知れない学習者のさまざまな意識や日本語運用の実態が浮き彫りになった。

初級日本語教科書で提示される発話文の主たる文体は丁寧体である。普通体発話は、教科書の後半で提示され、文末表現の男女差とともに扱われることが一般的であった(谷部 2010)。初級の早い段階から普通体と丁寧体を意識的に提示している教科書も見られるが、まだ限られている。中級段階以降では、文体のバリエーションがさまざまな形で提示されるものの、外国人日本語学習者にとって場面や相手に応じて適切な文体を用いることは困難な課題の一つであり、とくに普通体発話を使いこなすことは文末の男女差とも関わり、海外で学ぶ日本語学習者にとって一つの難関であったと、認識されてきた。

しかし、近年、日本語学習の動機として日

本のポップカルチャーへの関心が大きな位置を占めるようになってきているように、海外の日本語学習者をとりまく環境はこの約 10 年で大きく変化した。学習者はインターネット等さまざまなメディアを通して、日本語のバリエーションにアクセスすることが可能になっている。海外では、学習者の発表の場として日本語スピーチ大会が開催されることが多いが、2000 年代に入ると、丁寧体を基調とするスピーチ以外に、アニメアフレコ大会やマンガの吹き出しに日本語の台詞を入れて面白さとオリジナリティーを競うコンテストなども実施されている。

このような環境の中で学ぶ日本語学習者が、発話末の丁寧体、普通体を軸とするスピーチスタイルをどのように認識し運用しているかを、インタビュー及び自然談話から探索的に検討した。

その結果、スピーチスタイルの習得に関しては、以下の点が示唆された。

(1) 短期留学生の来日前の学習環境、日本語レベルはさまざまであるが、非日本語環境において普通体の習得が丁寧体よりも困難という状況は一般的とは言えなくなっている。

(2) 来日後の普通体習得には、同じ留学生として生活環境を共有し対等な関係を築きやすい非母語話者間の学習者場面が寄与している。

(3) 接触場面においては、日本語母語話者と非母語話者の親しさの認識と普通体使用が必ずしも一致しない状況が見られる。

来日前は丁寧体の使用が主であったという中級レベルの留学生も、1 年という短い留学期間にもかかわらず、友人たちとの日々の生活の中で普通体を身につけていっている。注目に値するのは、普通体を身につけていった過程を語る際に、学習者（日本語非母語話者）どうしの交流に言及するものが多い点である。留学生にとってもっとも身近で親しい関係にある、つまり、普通体の使用がもっとも自然な相手が、日本語非母語話者の親しい留学生だということである。とくに同一のプログラムで学び、同じ寮で生活している協力者の場合、課外活動等でも同一行動をとることが多く、早い段階から対等で親密な人間関係を構築しうる。こうした環境が自然な普通体習得を促していると言えるのではないだろうか。

[引用文献]

・ 渋谷勝己 (2007) 「なぜいま日本語バリエーションか」 『日本語教育』 134 号, 6-17, 日本語教育学会

・ 筒井佐代 (2012) 『雑談の構造分析』 くらしお出版

・ 野田尚史 (2012) 「日本語教育に必要なコミュニケーション研究」 『日本語教育のためのコミュニケーション研究』 1-20, くらしお出版

・ ファン, サウクエン (2006) 「接触場面のタイポロジーと接触場面研究の課題」 国立国語研究所 (編) 『日本語教育の新たな文脈』 120-141, アルク出版

・ 宮崎里司 (1999) 「接触場面でのコミュニケーション調整とそのディスコースパターン: 自己マーク自己調整を中心として」 『早稲田日本語研究』 7 号, 早稲田大学国語学会, 65-76, ひつじ書房

・ 宮崎里司 (2002) 「第二言語習得研究における意味交渉の課題」 『早稲田大学日本語教育研究』 創刊号, 71-89

・ 谷部弘子 (2010) 「モデルとして捉えられた男女の普通体発話 初級日本語教科書にみるバリエーションの提示と可能性」 遠藤織枝・小林美恵子・桜井隆編著 『世界をつなぐことば ことばとジェンダー / 日本語教育 / 中国女文字』 317-332, 三元社

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 2 件)

谷部 弘子、高橋 美奈子、本田 明子、日本語環境は短期留学生の対話能力にどのような作用を及ぼすか、AJE、査読無、2016 (印刷中)

谷部 弘子、日本語のスピーチスタイルに対する学習者の意識 短期留学生へのインタビューから、ことば、現代日本語研究会、査読有、36、2015、34-47

[学会発表] (計 3 件)

高橋 美奈子、谷部 弘子、本田 明子、接触場面におけるスピーチスタイルの選択 学習者による自然談話の分析から、バリ 2016 年日本語教育国際研究大会、2016 年 9 月 9 日～10 日 (発表確定)、インドネシア・バリ

谷部 弘子、高橋 美奈子、本田 明子、日本語環境は短期留学生の対話能力にどのような作用を及ぼすか、AJE 第 19 回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム、2015 年 8 月 27 日～29 日、フランス・ボルドー

本田 明子、谷部 弘子、高橋 美奈子、日本語母語話者との会話で何が学べるか 非日本語環境における学習者の日本語習得の特徴、シドニー 2014 年日本語教育国際研究大会 (SYDNEY-ICJLE2014)、2014 年 7 月 11 日～12 日、オーストラリア・シドニー

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

谷部 弘子 (YABE, Hiroko)
東京学芸大学・留学生センター・教授
研究者番号：30227045

(2) 連携研究者

高橋 美奈子 (TAKAHASHI, Minako)
琉球大学・教育学部・准教授
研究者番号：60336352

本田 明子 (HONDA, Akiko)
立命館アジア太平洋大学・言語教育センター・
准教授
研究者番号：8033130